なんか高校生が美少女とウハウハするんじゃないかな（仮）

もうふ星人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんか高校生が美少女とウハウハするんじゃないかな（仮）

【Ｎコード】
Ｎ４４１５Ｕ

【作者名】
もうふ星人

【あらすじ】
鬼畜イケメン高校生が、美少女を囲いハーレムをつくってウハウハする話。

…ではないです、残念ながら。
ほんとに残念ですね、えぇ。
ウハウハしてぇ。

高校生の時、経験したいと思うような”恋”。
これはそんなお話。

興味のある方はどうぞお進み下さい。

◆◇ぷろろーぐ◇◆（前書き）

美少女ラブコメ（仮）です。
携帯で閲覧されることを想定して書いてみました。拙い文章ですがよろしければ読んでみて下さい。

◆◇ぷろろーぐ◇◆

瞼が目に入れるのを拒むほどの日射しが俺の肌をジリジリと焼く。

季節は真夏。

学生である奴は期末テストというハードルを跳び越え…たり、蹴り飛ばしたり、はたまた諦めてハードルの下をくぐったりしただろう。

今年で高校二年になる俺もまた、ハードルをそこそこな感じで通過し、言いようのない開放感が脳を埋め尽くす。

「あっちー…」

帰路に自転車を滑らせながら、思わず喉から出た言葉。

暑い。

額を伝う汗。

制服のシャツが肌に吸いついてもたらされる不快感。

耳の奥で五月蝿いほど響く蝉の大合唱。

雲ひとつ見当たらない快晴。

まさに夏。

高校から俺の家までをドーム的なので覆い、１８℃に設定した冷房様を備えつけて欲しいものだ。

だが俺はそんな夏が嫌いじゃない。

なんでかって？

何か起こりそうでワクワクすんじゃん。

宇宙人が現れるとか、超能力に目覚めるとか、そういうのを期待している訳じゃないけれど。

こんなに暑けりゃ頭わいて、いろーんなこと妄想しちゃうっしょ？

いーじゃん、夏だし。

夏サイコー。

そんな俺、佐々木亜希１６歳、性別男性、獅子座のＯ型、好きなタイプは隣のクラスの〈京乃都〉ちゃん☆

そしてそして。

「彼女募集中ーーーーー！！！！！！！」

…切実に。

◆◇ぷろろーぐ◇◆（後書き）

いかがでしたでしょうか。
ぷっと笑えるようなコメディ要素目指します。
難しいですが、頑張ります。
興味あれば続きも待っていて下さい。

お付き合い下さりありがとうございました。
よかったら感想なり、アドバイスなりお残し下さい。

れっすん1＊であう

「ただいま」
奥から「お帰り」の一言はない。
一人暮らしゆえ当たり前なのだが、時々寂しくなる。猫でも飼おうかな。

梅雨が明けると、太陽さんが日本人をいじめることを趣味にし始めたのかと疑うほど、ぐんと気温が上がった。
おかげで帰宅後のシャワーが習慣になり水道代も上がった。

さっそく汗を流そうと脱衣所に向かうが…

何故か女の子らしき影がドアに透けている。

なぁんだ夢オチか☆おやすみ！そしておはよう！
目を瞑って現実逃避してみたが、女の子は機嫌良さそうにシャワーを浴びている。

俺の！家の！シャワーを！

他の人の家と間違ったか？
しかし、家具の配置も、昨日食べたカップラーメンの残骸も、壁のポスターのシミにいたるまで全てマイホームだ。

これ何てエロゲ？

エロゲなら選択肢はこうだ。
?何もせずリビングに戻る
?ノックをしてみる
?男らしくドアを開け、やらないかと声をかける。

…?はないだろ、?は。
ノックか放置か。
やはりここはノックしてみるべきか…

ガチャ

「「あ」」

彼女の声と俺の声が重なった。
ちなみに俺は相手の顔を見て"彼女"と判断した。断じて小ぶりだが、女性らしい膨らみを持った胸を見て判断した訳ではない。決して。…決して！

「きゃぁぁぁぁぁあぁぁぁぁああ！！！！！」
突き抜けるような悲鳴と共に、
俺の頬に平手打ちが…………
きませんでした。

変わりに
「タオル」
そう言って手を差し出してくる。タオルを渡せということだろう。
ちなみに言っておくが彼女は全裸である。なるべく見ないように気を使う俺超エラい。

「…どうぞ」
「ん。つか、邪魔」
「あ、すいません」
睨まれてリビングに戻ってきた。

待て待て待て待て。ウェイト！
何があった。何であの子は男に裸を見られて平然としてるんだ！？
第一何で俺の家のシャワー勝手に使ってんだよ！つかどうやって俺ん家入った！！？？

疑問がありすぎて思考回路の導線が切れてしまいそうだ。

「ふぅ…さっぱりしたー。扇風機つけて」ＯＫ！スイッチオン☆

「じゃねぇ！何馴染んでんのお前！！」
「…チッ。うざ」

エェェェェェェェ…
性格悪ぅぅぅぅう…

「あ、あのぉ……」
かしこまってしまう。女の子コワイ。
「何？」

聞きたいことが多すぎて。
聞いていいことがわからなくて。

つい、口から出た質問は一番聞きたかったことだった。

「何カップ？」

れっすん1＊であう（後書き）

お付き合いありがとうございました。

やっと話が動きだしました。
コメディにもっと力を入れたいです。

よろしければこれからも
お付き合い下さいませ。

感想やアドバイスいただけると嬉しいです。

れっすん2＊はなす

仮の話をしよう。

実は俺が二重人格で、もう一人の人格の”俺”が俺の知らない間に彼女をつくって、裸を見られるのも抵抗ないほど、仲が進行していたとする。

まぁ、んな訳ねぇがな。

１６年と１１ヶ月生きてきて、記憶違いの類は一度もなかった。

では、この罵声を浴びせながら俺のスネに蹴りをいれたこの女は一体誰だ。

１ｈｉｔした箇所がまだ熱を持ち痛む。ついでに俺のガラスのハートも痛む。咄嗟に口をついて出た質問がミスチョイスすぎた俺のせいな訳だが。

肝心の本人はというと、夏期中は俺の家の人気ＮＯ．１アイドル扇風機たんを独り占めしている。

冷房たんのオーディションは貯金と検討中だ。

ってかここ俺の家だよな？

彼女はシンプルな洋服に着替えをすませていた。服は彼女の持ち物のようだ。

座っていると床を蛇のように這うほど美しく伸ばされた金に近い髪は、扇風機の風になびいて、光を吸収して金糸のようにキラキラと輝く。

ツリ目がちな大きな目に、小さくも高い鼻。
１６５センチはあるだろうか。
スラリとした細身の体型は、ピタリとした服によりさらに強調されている。しかし、あまり胸は強調されていない、残念だ。
肌は程よく白い。

一言で言えば、絶世の美少女。

「こっち見んな。キモすぎる」

ただし、
性格最悪。

「…で？何か聞きたいことがあるんじゃないの？」
「何カッ「殺されたいか」
どうやら胸のサイズを気にしているようだ。ははっ、ざまぁ！

「面倒だけど話してあげる。感謝しろ」

『ほ、本当は面倒なんだけど、あんたの為に仕方なく話してあげる。感謝しなさいよね！（赤面）』
のような甘い要素が１ミリも感じられない言い草だ。

「じ、じゃあ…何でお前は俺の家にいんの？」
「お前じゃなくてユイ様でいいわよ。住んでるからよ」
こいつ…何さらっと様付け要求してんだ。
「…住んでる？いつから？」

「んー…一週間前？」
「どこに？」
「ここに」
「え？何号室？」
「４０３」
「それは俺の部屋だって」
「だーかーらぁ。あんたの家！ここ！ｈｅｒｅ！に住んでんの！！」

どういうことなの。

「はぁぁぁー。察しが悪い馬鹿ね。いいわ、説明してあげる」
ため息とかこっちがつきたい。
「単刀直入に言うと…」

「私は人間じゃない」

「鬼みてぇな性格だもんな！納得だいってぇ！！」
さっきと同じ箇所をまた蹴られた。２ｈｉｔ！

だっていきなり人間じゃないって言われて信用できるか？
俺は無理だ。宇宙人なの、とか言われたらいい病院をオススメしようと思う。
夏だからな。頭わいたんだな。それかただの電波ちゃん。

「何か失礼なこと考えてるわね。馬鹿面に書いてあるわよ」
「書いてる訳あるかぁ！」
「馬鹿面は認めるんだぁ。まぁ、認めざるおえないわよね、お馬鹿さん」

うっぜぇぇぇぇぇ。
こいつうぜぇぇぇぇぇ。
くっそ…今すぐ殴ってやる。美少女じゃなかったらな！

恨めしそうに残念電波美少女ユイ様（笑）を見ていると、俺の方に向き直り正座した。
透き通った青い瞳にまっすぐ見つめられると、真夏の青空にとけてしまいそうな感覚に陥る。
人間離れした、その顔をみていると、なるほど。人間じゃない説が不思議と信じられる。
きっと彼女は妖精か何かだ。

「人工生命体ヒューマノイド。シリーズNO．８１１。チャンネル、ユイ。ＩＤコード０３２１９８１５７７」
蒸し暑さを相殺するかのような涼しい声が鼓膜を震わせる。扇風機の羽音がユイの喋る間だけは不思議と耳に届かない。

ユイは初めての笑顔を俺に見せた。
それも、とびきりの笑顔だ。

「私は貴方に恋をしにきました」

れっすん2＊はなす（後書き）

今回は少し長め。
お疲れ様でした。
そして、ありがとうございます。

ようやく話が見える展開に。
ファンタジー要素はあまり入らない予定です。

私情のため、しばらく更新は遅れるかもしれませんが、
お付き合いいただけると嬉しいです。

よろしければ感想なりなんなり
残してやって下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4415u/

なんか高校生が美少女とウハウハするんじゃないかな（仮）

2011年10月9日10時52分発行